

# 取り立て助詞「ハ」の対比の条件

——「花子がコップは割った。」は何故おかしいか——

市 川 保 子

## 1. はじめに

「花子がコップを割った。」、また「コップを」を文頭に出した「コップを花子が割った。」という文の、名詞句「花子が」と「コップを」を「ハ」で取り立てると、次の6つの文が出来る。

- (1) a 花子はコップを割った。  
b??? 花子がコップは割った。  
c? 花子はコップは割った。
- (2) a コップは花子が割った。  
b コップを花子は割った。  
c?? コップは花子は割った。

疑問符を付けた(1b)(1c)(2c)は、単独の文としては座りが悪く、その座りの悪さは(1c)→(2c)→(1b)となるに従って大きくなっている。これらの3文は何故、文として適格性を欠くのであろうか。

本稿は、構文的、及び意味的対比の条件を設定し、それらの条件から、これらの3文が何故、適格性を欠くかを考察することを目的とする。

「ハ」がどのような条件のもとに主題を表し対比を表すかについて、寺村秀夫(1985)は次のように述べている。

どの部分が何と対比されているのかは、その付く語によってわかる場合もあるが、文脈あるいは状況がわからなければわからない場合も多い。また、その社会の価値観とか制度とかについての知識がなければ完全にはわからないということも珍しくない。「ハ」はよく題目と対比を表すといわれるが、その違いは、一部は構文自体に依存し、一部は文脈、状況、社会通念にも依存している。

寺村の指摘通り、「ハ」の対比については、構文的、意味的考察と同時に文脈・状況を中心とした語用論的考察が必要である。最終的には後者が決定条件となる場合が多いであろう。しかし、文頭に掲げた(1)(2)のような例を説明するためには、文脈・状況的要因を排除して、まず統語論上からどの程度のことと言えるかを見定めておかなければならぬと考えられる。本稿では統語論的考察を中心に行う。2-1で「ハ」の文中での位置が対比の度合いと関係することを、2-2で「ハ」の格と対比、2-3で「ハ」に前接する

語の意味的特徴と対比の度合いについて考察する。また、3では考察の結果を用い、(1b)(2c)が何故おかしいかを考える。

本論に入る前に「ハ」の対比機能について触れておきたい。一つの文において、対比命題「XハP」があるとき、そこから引き出される被対比命題は通常「XハQ」という形をとる。「X」と「Y」は同じセット・メンバー、「P」と「Q」は相対立する述語である。例えば、「今日は行く」という文から生じる対比は「明日は行かない」となって、「今日」と「明日」は同じトキというメンバーであり、「行く」「行かない」は述語が肯定・否定で対立している。一方、「ハ」と同じ取り立て助詞「モ」について見ると、対比命題「XモP」あるとき、そこから引き出される被対比命題は「YモQ」という形をとる。「今日も行く」という文から生じる対比は「昨日も行った」また「明日も行く」などとなって、述語はPが肯定であればQも肯定、逆にPが否定であればQも否定となる。このように述語との関係から「ハ」は対立的対比、「モ」は並立的対比をなすが、本稿では必要な場合を除いて「ハ」の対比、「モ」の対比と呼ぶことにする。

## 2-1. 「ハ」の文中での位置と対比

「ハ」の文中での位置が対比の度合いに関係するかどうかについて、次の(3)(4)を見てみよう。

(3) レール? レールは出さないんだよ。ポイントレールとワイ字型は出す、出していいけど…… (録音器)

(4) 枳餅は、今日でも飛驒の白川はじめ奥山では食べている。(米と日本人)

(3)は子供の会話であるが、「出す」という述語の前の「Xハ」、つまり「レールは」と「ポイントレールとワイ字型は」の両者が対照的にとらえられている。また、(4)では「枳餅は」が文頭、「奥山では」が述語の直前に来ており、ここでも述語の直前の「奥山では」に対比が生じている。そこで「Xハ」の位置を文頭と述語の直前に分け、文頭の「Xハ」と述語の直前の「Xハ」の対比の度合いについて考えてみる。

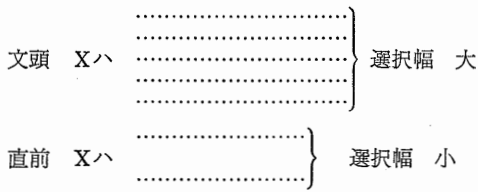
ここで文頭の「Xハ」とは、述語から離れて位置し、かつ、文の始めに現れる「Xハ」のことであり、文の始めにあっても述語の直前に位置する場合は文頭とは見なさない。

今、「Xヲ」が「ハ」で取り立てられた次の(5)(6)を例にとって、「Xハ」が文頭に来た場合と述語「P」の直前に来た場合(それぞれ「文頭」「直前」と表す)について考えてみる。

(5) 文頭「XハP」 豚肉はソテーにして昼時にみんなで食べた。

(6) 直前「XハP」 豚肉は食べた。

(5)において、文頭の「Xハ」を受ける「P」は「ソテーにして」「昼時に」「みんなで」のように複数の連用修飾成分を持っている。つまり、「Xハ」という外的背景のもとに色々なことが語られる可能性を持つ。一方、(6)の「Xハ」は述語の直前に位置している。そして「Xハ」を受ける「P」は「豚肉」を食べたか食べなかったか程度にしか語ることができない。これを「P」の選択幅という点から見れば、



となつて、直前「Xハ」の方が文頭「Xハ」より狭い選択幅を持つことになる。「P」の選択幅が狭ければ狭いほど、特に二者択一の場合は、「P」の対立関係が先鋭になると言えよう。そして対立関係が先鋭になると、それだけ対比の度合いが大きくなると考えられる。

「P」の選択幅にどのような違いがあるかを、次に具体的にみることにする。

(次の①～③は連続するものとし、③においてどの程度の選択幅があるかを比べる。)

1) 「文頭Xハ」の場合

- (7) 「カラ」
- ① 中国から射撃チームがやって来た。
  - ② 北朝鮮からも射撃チームがやって来た。
  - ③ ソ連からは {
    - 射撃チームは参加しなかった。
    - 柔道のチームがやって来た。
    - 出場辞退の報が届いた。
    - .....

- (8) 「ガ」
- ① 一郎が東京へ行った。
  - ② 二郎も東京へ行った。
  - ③ 三郎は {
    - 東京へ行かなかった。
    - 大阪へ行った。
    - 家で寝ていた。
    - .....

「カラ」「ガ」とも③の文頭の「Xハ」、「ソ連からは」「三郎は」については色々のことを語る事ができる。一方、述語の直前の「Xハ」についてはどうであろうか。

2) 「直前Xハ」の場合

- (9) 「ヲ」
- ① 武男は国語を勉強した。
  - ② 武男は算数も勉強した。
  - ③ 武男は理科は {
    - 勉強しなかった。
    - ?

ここでは、述語の直前の「Xハ」、「理科は」については「勉強しなかった」以外語ることができないように思われる。次の例も同じである。

- (10) 「ガ」
- ① この部屋にはテレビがある。
  - ② この部屋にはクーラーもある。
  - ③ この部屋には冷蔵庫は {
    - ない。
    - ?

このように、1)の文頭の「Xハ」と2)の直前の「Xハ」を比べると、1)の方が2)

より多くの「P」を取り得ることがわかる。

次は動詞のとりべき連用修飾成分のいくつかが省略されて、残った成分が動詞の直前に来ている例であるが、これも今までと同じ理由で、選択幅が狭くなると考えられる。

### 3) 連用修飾成分が省略された場合

まず省略が起こらない場合について考えてみよう。

- (11) ① 一郎が彼女の家を知っている。  
② 二郎も彼女の家を知っている。  
③ 三郎は 

{	彼女の家を知らない。
	太郎の家を知っている。
	先生の家を知っている。
	.....

となつて、「P」の選択幅は広い。一方、「彼女の家」が省略されると、

- (12) ① 一郎が知っている。  
② 二郎も知っている。  
③ 三郎は 

{	知らない。
	?

となり、③の「P」の選択幅が狭くなっている。従つて、いくつかの連用修飾成分が省略されて残りの成分が述語の直前に位置したときは、そこに対比が生じると考えられる。

以上の考察から、「ハ」の文中での位置は対比の度合いに関係すると言えよう。そしてその関係の仕方は、文頭に位置する「ハ」は対比の度合いが低く、述語の直前に位置する「ハ」は対比の度合いが高くなると考えられる。

## 2-2. 対格「ハ」と対比

寺村は「Xハ」が対比的となる条件の一つとして格を上げ、次のように述べている。

- (13) a 母はきのうパイを焼いた。

というような文を、

- (13) b パイは母が焼いた。

c きのうは母がパイは焼いた。

というような文と比べてみると、述語が動作性の場合、その主体が「ハ」で取り立てられた場合には別段影は感知されないことが多いが、対象や時、場所などを表す名詞(プラス格助詞)が取り立てられると、それが対比される影が感知されるということが分かる。

寺村は「Xハ」から感知される対比物を対比の影と呼んでいるのであるが、次にいくつかの作例で、格が対比の度合いと関係するか否かを見ることにする。

- (14) a 花子は太郎をなぐった。

b 太郎は花子がなぐった。

- (15) a フファドさんはインドネシアから来た。

b インドネシアからはフファドさんが来た。

- (16) a 太郎は九州へ行く。  
 b 九州へは太郎が行く。

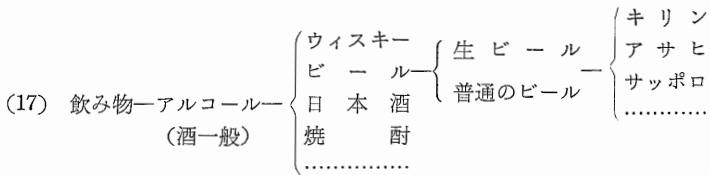
(14)~(16)において、各文aの「Xハ」はいずれも主格である。一方、(14b)の「Xハ」は対格、(15b)は「カラ格」、(16b)は「へ格」である。(14)では、(14a)の主格「花子は」には他との比較は感じられないが、(14b)の対格「太郎は」には他の人間との対比が存在し始める。(15a)においても、主格の「フアドさんは」からは対比的なものは浮かばないが、(15b)の「インドネシアからは」には、「他の国からは他の人が来た」という対比が存在する。(16)においても同様で、「太郎は」に対して特に他の人物は浮かんでこないが、「九州へは」では、「他の場所へは他の人が行く」という対比が出て来ている。このように(14)~(16)のa,bの比較からも、寺村の主張通り、主格「ハ」に比べて、対格、「カラ格」、「へ格」などの「他の格プラス「ハ」」の方が対比の度合いが強いということが言えよう(注1)。

### 2-3. 前接する語の意味と対比

対比命題「XハP」に対する被対比命題「YハQ」において、「X」と「Y」は同じセット・メンバー、「P」と「Q」は相対立する述語である。では、ここでいうセット・メンバーとは具体的にはどういうものであろうか。

寺村はXとYについて、「XとYの関係は、なんらかの意味でセットとして捉えられるものであれば何でもよい。」とし、XとYの意味的な対立関係の中には、(男—P、女—Q)(既婚者—P、未婚者—Q)のように相補的対立を成す二項の場合、(将棋—P、碁—Q、麻雀—R)(朝—P、昼—Q、夜—R)のように三項以上の相補関係の場合があり、相補関係が二項である方が三項以上である場合より、対比が際立つと述べている。

今、アルコール飲料である「ビール」を例にとると、「ビール」は次のような意味概念を持つと考えられる。



「ビール」は「酒一般」の下位概念として、「ウイスキー」「日本酒」「焼酎」などの同位概念と相補的対立関係にある。また、下位概念として、「生ビール」「普通のビール」、また、ビール製造元という区分からは「キリン」「アサヒ」などを持ち、それぞれ互いに相補的対立関係にあると考えられる。もし、「ビール」以外に「ウイスキー」しかアルコール飲料が存在しなければ、また、「キリン」に対して競争相手が「アサヒ」しかなければ、それぞれ、二項の相補的対立関係となり両者の対比はより際立つと言えよう。

では次に、実際の文の中で、「ビール」がどのような語と対立関係を持ち得るかを、「太郎はビールは飲むが、……」という文の中で見てみよう。

(18) 太郎は ビールは飲むが、

- ? アルコールは飲まない。
- ウィスキーは飲まない。
- アサヒは飲まない。
- 生ビールは飲まない。
- ? 賭け事はしない。

(18)において、「ビール」は自分と同位(ウィスキー)か下位概念(アサヒ、生ビール)とは対立関係を持つことはできるが、自分の上位概念(アルコール、賭け事)とは対立関係を持つことはできないようである。「賭け事」は生活の娯楽、楽しみの一つとして「アルコール(酒一般)」と同位(相補対立関係)に立ち、「太郎は酒を飲むが、賭け事はしない。」と、酒一般に対しては対立するが、その下位概念である「ビール」とは対立しないようである。

意味的な対立関係について、筆者は小規模な調査を行ったことがある。対象者は日本人10人で、調査形式は、逆接の接続助詞「が」で導かれた前文に、対象者が文を続け、文全体を完成させるものである。与えられた前文には「Xハ」が二つ含まれており、対象者がそのうちのどちらを後の文で対比させているかを見る目的であった。次に問題と結果の具体例を2, 3示すことにする。

1. 私は肉は食べるが、……

2. 夫は焼酎は飲むが、……

1, 2が与えられ、対象者はこれに続けて文を作る。

1では全員が述語の直前の「肉は」に対比を置いていた。得られた作文の典型例は次のようであった。

1' 私は肉は食べるが、魚は食べない。

一方、2でも述語の直前の「焼酎は」を他のアルコールと対比させて、

2' 夫は焼酎は飲むが、ビール(ウィスキー)は飲まない。

とした者が10人中7人を占めていた。しかし残りの3人は対比される部分が「焼酎」でなく文頭の「夫」に移り、

2'' 夫は焼酎は飲むが、私は飲まない。(注2)

2''' 夫は焼酎は飲むが、妻は飲まない。

と作文していた。1では全員が述語の直前の「肉」を対比させていたにもかかわらず、2では対比が文頭の「夫」に移り始める。1の「私」がセット・メンバーを持たない語であるのに対し、2の「夫」は「妻」と二項対立にある語である。「妻」との対比が際立っているために、位置的には対比の小さいと考えられる文頭の「夫」が対比されたと考えられる。次の問題にも同様な反応が見られた。

3. 私は鯨肉は食べるが、……

4. 日本人は鯨肉は食べるが、……

3, 4も1, 2と同じく前文に「Xハ」を二つ持つ。1, 2と異なる点は、述語の直前の「鯨肉」がセット・メンバーを持ちにくい語であるということである。3では1のとくと同じく、全員が述語の直前の「鯨肉は」に対比を置いていた。作文の典型例は次のよう

ある。

3' 私は鯨肉は食べるが、豚肉（とり肉）は食べない。

しかし、それが4になると反応が大きく二分された。一つは3と同じく述語の直前の「鯨肉は」を対比させて、

4' 日本人は鯨肉は食べるが、      肉は食べない。

とするもの。しかし「鯨肉」に対立するもので、日本人が食べないものが見付からないためか、

4'' 日本人は鯨肉は食べるが、いるかの肉は食べない。

のような苦肉の例が見られた。もう一つの反応は文頭の「日本人は」に対比を置いて、

4''' 日本人は鯨肉は食べるが、ヨーロッパ人（ノルウェー人）は食べない。

とするものである。「鯨肉」を対比させるものと「日本人」を対比させるものでは、後者の方がやや上回った。「鯨肉」に対立する適当なセットメンバーが見付けにくいこと、また、日本人の鯨捕獲に対するヨーロッパ諸国からの非難が報道されていたことなどから「日本人は」に対比の度合いが強くなり、本来的には、位置的にも、格としても対比の度合いが小さいにもかかわらず、4'''のような例が引き起こされたと考えられる。

以上の調査の結果からもわかるように、「Xハ」から「Yハ」が対比的に引き出されるのは、「X」の持つ、語としての意味論的特徴に起因する場合と、広くその事態の社会的現実や社会通念的な対立から対比が生じる場合があると言えよう。

しかし、どちらの場合も「X」から想定される「Y」との対立が顕著であればあるほど、「X」に対比の度合いが大きくなると考えられる。

### 3. 「花子がコップは割った」は何故おかしいか

では、次に文頭で提出した(1)(2)の考察に移ろう。

次の(1b)(1c)(2c)は適格性に欠ける文であった。

(1) a 花子はコップを割った。

b??? 花子がコップは割った。

c? 花子はコップは割った。

(2) a コップは花子が割った。

b コップを花子は割った。

c?? コップは花子は割った。

まず(1c)と(2c)、そして次に(1b)について、何故、適格性に欠けるかについて考えてみる。

#### 3-1. 「花子はコップは割った。」と「コップは花子は割った。」

(1) c? 花子はコップは割った。

(2) c?? コップは花子は割った。

(1c)は後ろに比較の対象が明示されると安定した文になる。

(1) c' 花子はコップは割ったが、皿は割らなかった。

一方、(2c) は対比的文脈があっても、依然不安定である。

(2)c' コップは花子は割ったが、……

(2c') からはどのような読みが可能であろうか。考えられる読みとして、

① コップは花子は割ったが、しかし、太郎は割らなかった。

と、「花子」が対比されるもの、そしてもう一つは、

② コップは花子は割ったが、しかし、皿は割らなかつた。

と、「コップ」が対比される場合である。

「花子は」と「コップは」を、位置、格、意味の3方向から比較すると、「花子は」は位置的には述語の直前にあり、格としては主格、意味的には直接的なセット・メンバーは持たない語であると考えられる(註3)。一方、「コップは」は、位置的には文頭にあり、格としては対格である。意味的には同位概念として「皿」「茶碗」などと三項以上の相補的対立関係にあり、「花子」よりはセット・メンバーが浮かびやすい語である。これらのことを対比の強さとともに並べると次のようになる。

	「花子は」 (対比の度合い)		「コップは」
位置	直前	大>小	文頭
格	主格	小<大	対格
意味		小<大	

(ここでの大・小は「花子は」「コップは」両者間の対比の相対的大・小のことである。)

「花子は」は述語の直前に位置しているので、文頭の「コップは」より対比の度合いが大きい。位置における対比の度合いの大小から出て来るのが①の場合であろう。述語の直前の「花子」に対して「太郎」など他の人物の存在が浮かんでくる。

一方、「コップは」は、文頭に位置するため対比の度合いが小さい。しかし、格としては対格で「花子は」の主格より対比の度合いが強い。また、意味的にも「コップ」の方が「花子」より他の物の浮かんでくる度合いが大きい。従って、格として、また意味としての対比の強さから「コップは」が対比される②の文が出てくると言えよう。

このように(2c)において、「花子は」「コップは」がそれぞれの対比の強さを主張するために①②のような2種類の対比が考えられるのであろう。

以上の考察から、(2c) は、次のように表すことができる。

(2)c コップは 花子は 割った。

対比 対比

「ハ」が二つ以上存在する文では、通常、そのうちの一つが主題になると考えられるが、(2c)の二つの「Xハ」は、どちらが主題となるか対比となるかが決まらず、「コップは花子は割った」を聞いた聞き手は、主題の定まらない文の中で、「コップは」「花子は」と同時に二つの対比を考えるために、文の意味関係がすぐにはつかめないと想像される。



### 3-2. 「花子がコップは割った。」は何故おかしいか

では次に、「(1b) 花子がコップは割った。」の考察に移る。

「花子がコップは割った。」が何故、不自然な文であるかについて、ここでは、「排他」と「対比」という観点から考えてみたいと思う。

三上章(1963)は「ガ」の排他的用法について次のように述べている。

排他的(他を押しよける)なのは「ガ」の方である。兄でなく、母でなく、「父が……行った」というときの「父が」こそ排他的というにふさわしい。

父は会社に行きました(が、母は在宅しております。)

父は会社に行きました(し、母も買い物にでておりますし……)

このような「父は」も、排他的とまでは言えない。対比的と言ったら当たるような用法である。兄でなく、母でなく「父が……行った」と、兄や母とちがって「父は……行った」との違いである。

「花子がコップは割った。」という文は、「コップは」のように「ハ」で取り立てられたものが存在するので、「雨が降っている」「犬が走っている」といった現象文ではない。「ガ」には現象文などに現れる中立の用法(「雨が降っている」)と、判断文に現れる排他的用法(三上の「父が…行った」)があり、(1b)の「花子が」は後者と考えられる。

一方、「コップは」は位置として述語の直前にあるため、対比的意味合いを持つ。

従って(1b)は、次のようになると考えられる。

(1)b 花子が コップは 割った。

排他 対比

(1b)において「花子が」は排他を表すため、聞き手は「太郎でなく次郎でなく和子でなく、花子が(コップを割った。)」と理解しようとする。一方、「ハ」は対立的対比を表すから、「コップは割った」を聞いた聞き手は「しかし、皿は割らなかつた」ということを対比的に思い浮かべる。排他の「花子が」が「花子がコップを割った」という肯定主張をしているのに、対比の「コップは」は「しかし皿は割らなかつた」という否定の含みを持つ。主張と含みにおいて肯否の対立がぶつかり合うために、(1b)は座りの悪い文となるのであろう。

一方、「ハ」の代わりに取り立て助詞「モ」で取り立てると次のようになる。

(1)b' 花子が コップも 割った。

排他 対比

(1b')は(1b)「花子がコップは割った。」よりは座りの良い文である。「モ」は「ハ」とは反対に並立的対比を表す。「コップも割った。」の持つ意味は、「皿を割った。そしてまた、コップを割った。」である。(1b')において「花子が」が、「花子がコップを割った。」という肯定主張をするのと同じく、「コップも割った。」も「皿を割った。コップも割った。」と肯定の含みを持つ。従って(1b')は、「肯定」「否定」と、相反する内容を同時に持つ(1b)「花子がコップは割った。」より適格文になっていると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では統語論的考察を中心に「ハ」の対比の条件を考えた。2-1で「ハ」の位置が、2-2で「ハ」の格が、また2-3では「ハ」に前接する語が対比の度合いに関係することを見た。文の中に「Xハ」が二つ以上あるとき、対比の度合いの強さを巡って、それぞれの「Xハ」は位置、意味、格においてせめぎ合うことになる。そのせめぎ合いのために、「花子がコップは割った。」「コップは花子は割った。」は不適格文になると考えられる。

最初に述べたように、「ハ」の対比の度合いを考えるには、統語論的考察だけでは不十分である。状況・文脈を始めとする語用論的考察が次の段階として不可欠であろう。しかし、「花子がコップは割った。」「コップは花子は割った。」の不適格性は、語用論的考察以前の統語論的考察でしか説明することはできない。

今後の課題として、「Xハ」の文中での位置、語の意味、格などの統語論的対比の条件が、文脈・状況の中でどのようにそれぞれを主張し合うのかを観察、考察していきたいと思う。

#### 注

- 1) 主格「ハ」と「他の格+「ハ」」の対比の度合いについては、後者が前者より強いと考えられるが、「他の格+「ハ」」間の対比の度合いの序列化は難しいようである。次の(1)~(3)の「X+他の格+「ハ」」間に対比の強さの違いを見ることは難しい。
  - (1) 現場には救助隊が派遣された。
  - (2) 現場へは救助隊が派遣された。
  - (3) 現場までは救助隊が派遣された。
- 2) 2'のように「私は」とした者は2人で、いずれも主婦であった。
- 3) 「花子」とよく比較される人物が現実存在すれば、その人物がセット・メンバーとなる。現実の存在しない抽象的な段階ではセット・メンバーは考えられないことになる。

#### 参考文献

- 三上 章 1953『現代語法序説』くろしお出版(1972年復刊版)  
——— 1963『日本語の論理』くろしお出版(1983年復刊版)  
久野 暉 1973『日本文法研究』大修館書店  
——— 1978『談話の文法』大修館書店  
寺村秀夫 1981「ムードの形式と意味(3)」『文芸言語研究 言語篇』筑波大学  
——— 1985「対比の構文と意味」『日本語と中国語の対照研究第10号』  
佐藤ちよ子 1976「主題化に関する主格名詞句の特性について」『国語学論集』  
尾上圭介 1981「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』東京大学国語国文学会

#### 例文出典

- 「録音器」『言語生活』筑摩書房  
篠田 統『米と日本人』角川新書

(筑波大学留学生教育センター)